



大学・法学部

アメリカの外交史
 ～その根源的な問題～



アメリカ外交史
 にしぎき ふみこ
西崎 文子 成蹊大学 法学部教授

東京大学教養学部卒業。一橋大学法学研究科修士号取得。イェール大学歴史学部博士課程終了、博士号(Ph.D.)取得。フルブライト奨学生、国際交流基金安倍フェロー。ハーバード大学、ラトガーズ大学、ケンブリッジ大学客員研究員など。1998年より現職。著書に『アメリカ冷戦政策と国連 1945-1950』(東京大学出版会)、『アメリカ外交とは何か』(岩波新書)など。

アメリカとはどのような国か

アメリカには本当にいらいらさせられる——アメリカを外から見て、そう思う人は少なくないのではないだろうか。素晴らしい物品を生産し、知識や技能にも優れ、多彩な音楽や映画で人々を魅了する力をもっているアメリカ。しかし、同時にアメリカは尊大で、自己中心的で、自国の経済的利益を強引に追求して世界を混乱させ、果ては戦争で各地に荒廃をもたらしながら自分たちは世界で一番の国と公言してはばかりません。私のアメリカ外交史



大阪 国立民族学博物館でのシンポジウムで

研究の根底には、このような矛盾がなぜ、どのように生じているのかを理解したいという欲求があります。言い換えるならば、アメリカとはどのような国なのかという大きな問いを背景に、アメリカの対外行動の特徴を分析するというのが私の問題関心です。その場合、アメリカ外交に見られる矛盾や逆説を説明するための一つの方法として、私が進めているのが、アメリカと国際秩序との関係に関する研究です。周知のとおり、ウィルソン大統領は、第一次世界大戦のときに国際連盟の創設を提唱し、これを実現に導きますが、肝心のアメリカはこの国際組織に加盟しませんでした。そのときの自国の行動を反省したアメリカは、第二次大戦中に新たな国際組織の結成を推進し、国際連合を創設します。国連本部がニューヨークに置かれたことは、国際社会の組織化こそが平和の礎であり、アメリカの国益にも寄与するという当時の新しい認識を象徴していました。



アメリカと国連の関係

しかし、それから六十年あまりたって、アメリカと国連との関係は、良く言っても不安定であり、時としては敵対的ですからあります。日本政府が、たとえ建前だとしても、国連や国際世論を枕詞として日本の外交政策を説明しようとするのは対照的に、アメリカでは、国連の意向や各国の



ニューヨーク大学M.ヤング教授を囲んで津田塾大学の藤田文子教授と

9・11世代といえるでしょうか。そのようなさまざまな「アメリカ体験」により、いながら、アメリカ外交史から見えてくる根源的な問題とは何かを考えていくのが、私の研究課題であり、また教育の課題でもあります。

小学校

ことばと格闘中



国語科教育
 きのした
木下 ひさし 小学校教諭

東京学芸大学、同大学院修了。1989年より現職。著作に『読み合う教室へ』『ことば遊びの王様』『国語科授業用語の手引き(共編)』『国語教室宣言(共編)』『子どもたちのことば探検(共編)』など。小中学校国語教科書編集委員。日本文学協会、日本作文の会、日本児童文学学会、日本国語教育学会等に所属。

成蹊との出会い

卒業論文を書かなくては、でも何を書こうかと迷っていた学生時代の後半ころ、ひとつの方向性を示してくれた本があります。滑川道夫著『映像時代の読書と教育』という新書版の小さな本です。滑川氏の膨大な著作群のなかではさほど注目されてはいませんが、私にとっては忘れられない本です。ことばの教育ってなんだか面白そうだなと思わせてくれたのです。

卒業後、四年間の小学校現場経験を経て大学院に進みました。国語科教育専攻でした。そこで国語科教育史の基本的な文献とし



「成蹊」と出会った3冊の本

伝統に連なりつつ

その学校に今自分がこうして在職しているとはなんとも不思議な縁を感じます。この三先生をはじめとする諸先輩から続く「成蹊」の伝統を担っていかねばならない責任も感じます。ただ、伝統といってもそれは昔ながらの材料で昔ながらの授業を行うということではないでしょう。それは、目先の流行やら社会状況に左右されず、子どもにとって大切なことは何かという本来の教育のあり方を今日的に追究し実践していく姿勢だろうと勝手に考えています。

古くて新しきもの

本稿が目にとまるときには新しい学習指導要領が告示されているはずですが、その要領の国語科編

世論の動向を重視する指導者はごく限られています。アメリカの政策と国連の決議とが対立する場合には、間違っているのは国連であり、アメリカは独自の判断で正しい政策を追求するのだと主張することすら珍しくありません。

アメリカの自負、そして優越性

アメリカは、なぜ一方では自分たちが世界の利益を実現する使命を担うのだと主張しながら、他方では世界各地の多様な意見に積極的の耳を傾けようとしないのでしょうか。その背後には、自分たちがこそが、近代民主主義の理念を掲げて誕生した「普遍性」を持つ国家であるという自負が、アメリカの優越性を裏付ける根拠としてとらえられ、アメリカのナショナリズムを煽ることにつながっているという「逆説」が存在するというのが私の見方です。

日本における「アメリカ体験」は、世代によって大きく異なります。戦争と占領を経験した世代、安保闘争の世代、ヴェトナム戦争世代、ポスト冷戦世代、そして今、私が教えているのはポスト9・11世代といえるでしょうか。そのようなさまざまな「アメリカ体験」により、いながら、アメリカ外交史から見えてくる根源的な問題とは何かを考えていくのが、私の研究課題であり、また教育の課題でもあります。

『思考と行動における言語』(S・I・ハヤカワ著、大久保忠利訳)という本があります。「一般意味論」という理論の解説書として半世紀以上も前に書かれたものですが、そこで示される内容は十分に現代の国語教育、つまり言語の教育に生かせるものです。いや、IT時代と呼ばれる現代にこそ生かさなければならぬ言語論なのです。

このように、新しいようで古い、古いようで新しいのが国語科、すなわち「ことば」の教育です。先の読解力養成といった現代社会からの要請という今日的な課題にも対応しなければなりません。その一方で、ことばが人間形成に深くかわることを考えれば、言語操作の教育のみで国語科教育を終わらせたりはなりません。こういう現代だからこその例えは優れた文学作品の持つ教育的な力も考えていきたいのです。

と、日々「ことば」と格闘しています。でも、ことばは友だちです。



理科フィールドワーク 秩父・長瀬にて